

「興讓館と学ぶ人びと」 展示資料解説

※実際の展示順とは必ずしも一致しません

※一部、実際には展示されていない資料があります

学館始終留 卷二（当館蔵地域史料 360-2）

興讓館創設に際し、学館御用懸に任じられた荏戸善政の自筆とみられる記録集。興讓館の竣工が目前に迫っていた安永5年（1776）4月中旬以降の日記と、興讓館の運営に係る検討過程などをまとめる。上杉博物館の特別展で展示されている同名資料巻一には安永4年からの諸記録などが収載されている。本資料には興讓館が竣工した際に納められた棟札が書き写されているが、そこからは興讓館は4月17日に竣工したことがわかる。

諸記録から一貫して感じられるのは、あわただしく創設準備にあたっていた荏戸ら関係者の労苦である。例えば、安永5年4月初旬の作と思しき検討事項の記録では、儒学の創始者・孔子をまつる聖堂で執り行う重要な祭典の積菜（せきさい）の開催日程について、本来は暦の上丁の日である6日の開催が望ましいが準備の時間が足りず、中丁の16日でも難しいので下丁の26日に執り行う他無いとする見解が記されている。「上杉家御年譜」などの諸資料によると実際に4月26日に積菜が挙行されたことがわかる。そもそも積菜は、紀元前の中国において、学校に入学する際に野菜などの贈り物をしたことを指すという。それゆえ、興讓館においては積菜が執り行われた4月26日が今日でいう入学式に相当したものと考えることができる。

また、本資料には「学館御建立之君慮」と題して藩主・治憲（鷹山）による学館創設の趣意や構想が八ヶ条につづられている。安永4年中に作成されたことは本資料の諸記録から明らかであり、良く知られる学館創設に係る治憲の「総評」よりも早い時期の文書であることがわかる。

詩経集註（当館蔵興讓館本シ 95）

五経のひとつである詩経に、南宋の儒者・朱子が注釈を加えたもの。版本で全8冊からなる。興讓館本として伝来した本書には各所に藩の儒者・片山家で旧蔵されていたことを示す蔵書印などがみられる。

5冊目の欄外に、幽王6年（紀元前776）から今年の辛亥年まで2446年隔てている旨の書き込みがみられるが、この辛亥の年は寛文11年（1671）に相当する。このことから本書は寛文11年以前の刊行であると推定できる。

前出「学館始終留」には、興讓館創設の準備段階において、片山家に「お預け」していた書籍類を興讓館で使用する方針である旨が記されている。そのことから、本資料は興讓館創設当初に使用された教科書である可能性が存在する。安永5年の興讓館創立に際し、当時の片山家当主・紀兵衛は興讓館のトップである提学の一人に任じられた。

韻府古篆彙選（当館蔵興讓館本イ 53）

こちらも片山家から興讓館へ移管されたものと考えられる書籍である。序文は元禄 10 年（1697）のものだが、刊行は正徳 3 年（1713）頃と推測される。

本書は漢字を韻ごとに分類した韻書と呼ばれる書籍のひとつ。興讓館での詩作のために用いられたものと考えられる。

宜雨堂集 上（当館蔵林泉文庫 291）

片山とともに興讓館の提学に任じられた神保容助（蘭室）の漢詩集。内容から文化年間頃の作成と考えられる。本書の用紙は神保の号の一つ「宜雨堂」と印刷されたものが使われている。また箱書きには「石梁樺島先生批圈 蘭室先生宜雨堂集」とあり、これらのことから、本書は神保が作成した漢詩に樺島石梁（久留米藩儒学者）が推敲を加えたものであると推測できる。

文政 5 年（1822）、同題の漢詩集が刊行されたが、そこに掲載されている漢詩文は本書の推敲が反映されたものとなっている。

枳菜行事（当館蔵林泉文庫 217）

枳菜執行に係る段取りを時系列で記したもの。二十日前からの準備すべき事柄や当日の進行、翌日の片付けまでを記す。

巻末の記述から本資料は興讓館創設 2 年目にあたる安永 6 年（1777）8 月に興讓館の役職である都講を務める千坂与市と片山代次郎が記したものとわかる。加えて、但し書きからは既にこの年の枳菜は執行済みであったものと推測できる。「上杉家御年譜」によるとこの年は 8 月 24 日に枳菜が執り行われたため、本資料は 8 月の末に作成されたものと考えられる。興讓館創設後、二度の枳菜を執り行った上で、今後の枳菜の参考とすべく本資料が作成されたのであろう。

先行研究によると、以前は藩の公費によって執行されていた枳菜であったが、財政難もあり享保 10 年（1725）以降は藩の手を離れ、儒家の片山家が個人的に行う儀式となっていた。興讓館創設によっておよそ 50 年ぶりに枳菜は藩の行事に復したことになる。その後、内容は簡素化されていったが幕末まで枳菜の執行は続けられた。

覚（西野孝八について）（当館蔵甘粕家文書 720）

興讓館上席生の甘粕虎之助（継成）から興讓館上層部への報告の覚書とみられる。作成は安政 6 年（1859）頃。興讓館で学ぶ西野孝八の勤勉ぶりを賞する内容。概要は以下のとおり。

孝八は安政 3 年、15 歳の時から学問を志し斎藤主計の扱いとして登堂。「大学」から勉強しはじめると誠に出精し比べる者が無いほどだった。少給で極難の者ながら分陰を惜み習読し、実家の南原から学館までの二里近くをいとわず、朝は未明から、昼は弁当持参で登堂した。初年の試業（試験）は四書の全部を扱い、翌年の秋ごろまでには五経を全て学習し終えた。斎藤主計はその志に感激して、一等を進めて「春秋左氏伝」を読ませ始める

と、孝八はますます感激して出精した。もちろん試業の成績は至ってよかった。三年目は「史記」、今年は「漢書」を試業で扱ったところ、進業は日々目立ち、文章の意義も理解するようになった。場所は僻遠の南原、身柄は少給の御手明の家の者で暇が無いはずが4年の間に進歩して、誠に感心の者である。

このように孝八の勤勉さと優秀さを激賞する虎之助であったが、覚書の最後をこのような一文で閉めている。「然らば学問の本山にもあい叶い候者につき、この段申し出候」

米沢には直接証拠となる資料の伝来は確認できていないが、孝八の子孫のお家に伝来した諸資料からは、孝八は幕末期に江戸の医学塾・順天堂へ留学したことが明らかである。そのため、甘粕が書いたこの覚書は孝八の江戸留学の推薦に関係して作成された可能性が想起される。

大学（当館蔵興譲館本タ 11）

興譲館で使用されたものと推測される一冊。題箋は大学とあるが、実際の中身は南宋の儒者・朱子が自身の見解を付して編んだ「大学章句」である。版本も流通していたが、本資料は全編手書きの写本である。

大学は四書のひとつで、はじめに読むべきものとされた。興譲館に入った西野孝八も「大学」から学び始めた。

論語（当館蔵興譲館本シ 26『四書朱子異同条弁』より）

「興譲館蔵書」印が捺された論語の書。西野孝八が興譲館に入った初年の試業（試験）の課題となった四書のうちのひとつ。

本書は清代の人である李沛霖が朱子の学説と他の儒者の学説の異同を体系的に整理・編纂し、弟の李禎が校訂した儒学書『四書朱子異同条弁』全40冊のうちの1冊。序文は清代の元号・康熙44年（1705）。当館には32冊が伝来している。

西野家の家伝によると、72歳で大正2年（1913）臨終の床についた孝八は「孔子曰く、七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰（こ）えず」と辞世を残したという。これは論語の為政篇に記された一文である。興譲館で学んだ教えが孝八の人生に大きな影響をもたらしたことが想像される。

春秋左氏伝（当館蔵興譲館本シ 219）

紀元前の中国の歴史を叙述した歴史書。「興譲館蔵書」印が捺されていることから、興譲館で使用されたものと推測される。「山吉蔵書」の書き込みなどに取り消しの線が引かれていることから、本書は藩士の山吉家などで所蔵されていたものが最終的に興譲館へ渡ったものと考えられる。経緯は不明であるが、興譲館で教科書として使われた書籍の出所を検討する上で重要な点であるといえる。

なお、奥付から本書は文政6年（1823）以降に出版されたものとわかる。幕末期にかけて興譲館で利用されたものと推測できる。

漢書（当館蔵興譲館本セ 92）

中国の前漢の歴史を記した書。本資料は 11 冊の体裁で伝来しているが、1 冊目の表紙に「史六」と筆記されている。これは、興譲館において蔵書を管理するために記された整理記号で、幕末頃に作成された興譲館蔵書の書目に記述された記号とも合致する。また、「興譲館蔵書」印も捺されていることから、本資料は近世の興譲館で使用された書であることに相違無いものと考えられる。17 世紀の中国で出版された汲古閣本。興譲館本には本資料の他 2 点の汲古閣本の漢書が伝来している。

興譲館書目（当館蔵林泉文庫 209）

幕末期に記されたと考えられる興譲館の蔵書目録。蔵書は経・史・子・集・和書・医書の 6 部に分類され、各部に 1 番から番号が付けられている。この書目で、史部の 6 番は漢書とある。前出の漢書（興譲館本セ 92）の表紙には「史六」と記されているが、この書目の記述から、興譲館で所蔵されていた書籍であることは明らかである。

（甘粕継成書状控書）（当館蔵甘粕家文書 724）

慶応 4 年（1868）6 月 2 日に甘粕から勝又用次郎と読める人物へ宛てられた書状の控書。6 月 1 日に負傷した西野孝八を連れ戻したことを賞する内容。諸資料によると西野は当時、戊辰戦争において藩の参謀を務めていた甘粕を補佐する役割を担い越後方面に従軍し、その際に負傷したことが知られている。西野のように学問に長け、医学の志があった人物でも戦いの前線に立たざるを得なかった当時の情勢がうかがえる。

（写真）（甘粕継成書状控、金内孝三郎について）（当館蔵甘粕家文書 725）

興譲館上席生・甘粕虎之助（継成）による書状控え。安政 6 年（1859）11 月頃の作と推定される。興譲館で学ぶ金内孝三郎（当時十五才）の勤勉ぶりを激賞する。金内家は藩家老・色部長門の家臣で窪田に居住していた。当時の興譲館は陪臣にも門戸が開かれていたことがわかる。

その日に学んだことを覚えるまで就寝しない、毎月塩断ちして亀岡文殊堂に参詣して学業成就を祈るなど、孝三郎の一方ならぬ学業への熱意に対し、甘粕は「不肖の者には珍しい者」とであると評価する。家の格式と学業の習熟を結びつける発想が当時の社会に少なからず根付いていたことがうかがえる文書でもある。

『窪田郷土史』によると、孝三郎の父・文郁は窪田で寺子屋の師匠を務めていたという。息子の孝三郎の超人的な勤勉さには父の影響もあったのだろう。また孝三郎の息子・孝吉は大正 8 年から昭和 3 年にかけて、窪田村長を務めた。

まぼろしの医学校（当館蔵 K377/お）

小形利吉著、昭和 56 年（1981）刊。明治 6 年（1873）、山形に創設された医学校・済生館の歴史を中心に綴るが、その前提として米沢での医学の興隆について触れられている。その中で、明治 2 年に置賜県病院が米沢の町に開設されたことが記されているが、その

開設に奔走した人物の一人に、孝八から名を改めた西野佐久（すけひさ）が挙げられている。また、同書の中では佐久は明治6年創立の天童私立病院の勤務医としても従事したことが記されている。

西野佐久は門東町に医院を開業し、後身の指導にも熱心にあたった。明治13年（1880）5月、西野ら米沢市内の医師はコレラ予防やその他の諸病の療法を討論するための衛生会を結成し、毎月25日を定期集会日とした。

（写真）西野芳太郎（当館蔵 K586.2/イ『米澤織物同業組合史』より）

西野芳太郎は佐久（孝八）の長男として明治2年（1869）に生まれる。十余年の歳月をかけて発明した「西野式力織機」は国内の共進会で評判を呼び、全国各地で採用された。門東町に工場を構え、米織組合の組合長なども歴任した。

（写真）西野式力織機（当館蔵 K586/O『米澤織物同業組合史』より）

西野孝八（佐久）の長男、芳太郎が発明した力織機。袴地の製織に適した足踏式力織機で、米沢織の大量生産化に大きく貢献したと評されている。

（写真）米沢新聞大正10年8月11日付2面（当館蔵）

米沢を訪れた秩父宮・高松宮の両親王の動向を記した記事の中で、西野利喜雄が発明した「天然色活動写真」が台覧に供されたことが記されている。西野利喜雄は芳太郎の子息で、孝八の孫にあたる。

カラーフィルムの実用化は昭和10年（1935）にアメリカのコダック社が開発したコダクロームが嚆矢とされているが、その十数年前に米沢の地で、一人の青年によって発明されていたことは今日ではほとんど知られていない。利喜雄によるカラーフィルムの発明は、他の文献などからも真実であったことが確認できる。

（参考）日米大正11年5月31日付3面（国際日本文化研究センター海外邦字新聞データベース収載）

サンフランシスコで発行された邦字新聞「日米」の記事に、西野利喜雄が渡米してアメリカで活動写真の会社を設立する考えであることが伝えられている。記事によると西野のカラーフィルムは大正9年には一応の完成を見て、この頃にはほとんど完成の段階であったとされる。しかしながら、利喜雄は渡米直前に26歳の若さで急死してしまった。その後の活躍如何によってはカラーフィルムの父となり得たことを考えると、惜しまれる早逝であった。

（写真）西野忠次郎（当館蔵 K289.1/ニ『西野忠次郎先生の思い出』より）

明治11年（1878）南原村に生まれる。興譲館在学中に、西野佐久の長女・キヌとその夫・慎一の養子となる。西野家の家伝によると、忠次郎の才覚に感心した佐久が西野家に迎え入れるべく奔走したという。

東京帝大医科を卒業後、山形市立病院済生館館長、慶応大学教授などを歴任。明治、大正、昭和の三代にわたって活躍した内科学の権威と称される。昭和 36 年（1961）没。

西野忠次郎先生の思い出（当館蔵 K289.1/ニ）

昭和 36 年（1961）に逝去した西野忠次郎の追悼集。慶応大医学部内科同窓会により昭和 39 年発行。友人や同僚、門下生など、多くの関係者から思い出が寄せられ、所々に忠次郎の写真なども添えられている。

有為会雑誌第 36 号（当館蔵 K051/ヨ/36）

米沢をはじめとする置賜地方出身者の奨学育英、産業・文化振興や親睦を目的に設立された米沢有為会刊行の雑誌。明治 26 年（1893）発行の 36 号の雑報で、私立米沢中学校は 5 月に県知事より管理を認許されて県立同等の資格となり校名を米沢尋常中学校に改称された、と伝える。これは実質としては管理が県に移管されたことになったといえる。

それまで、藩校興譲館の流れをくみ、私立として旧藩士らによって運営されてきた中学校であったが、在校生への徴兵猶予が無いことや上級学校への進学資格を得られないことなどが原因で転校する生徒が増大し、私立での継続は困難を極めていた。

有為会雑誌第 102 号（当館蔵 K051/ヨ/102）

明治 33 年（1900）発行の有為会雑誌より。同年 4 月から校名を山形県米沢中学校へ改称することを伝える。明治 28 年、校名を米沢中学興譲館へ改めていたが 5 年後に再び改称されたことになる。この文章では詳述されていないが、今回の改称は学校運営が完全に県立化されたことに伴うものであった。

（写真）米沢新聞明治 33 年 2 月 8 日付 3 面（当館蔵）

明治 33 年（1900）4 月より米沢中学興譲館から山形県米沢中学校へ改称されることを伝える米沢新聞の記事。前述のとおりこの時に完全県立化されたのであるが、紙面ではそのことは報じられていない。既に明治 26 年に事実上の県立化がなされていたためと思われる。それゆえ、紙面の扱いも三行半程の極々小さいものであった。

（写真）米沢新聞明治 33 年 4 月 3 日付 3 面（当館蔵）

米沢中学興譲館の校名での最後の卒業式の挙行を伝える。

この年の卒業生は二十名弱と決して多いとはいえないが、明治 30 年（1897）当時の生徒数は 400 名に達する程で、この記事が出た時点では校舎の新築移転が決まっていた。

（写真）米沢新聞明治 33 年 4 月 5 日付 3 面（当館蔵）

中学校生徒たちの修学旅行出発を伝える記事だが、校名が昨年度までの興譲館のまま報じられている。短い記事だが、当時の人々の間に興譲館の名前が浸透していたことがうかがわれる資料といえる。

興譲 第二巻第二号（当館蔵 K051/ヤ）

明治 34 年（1901）8 月 10 日発行。同窓会組織の興譲会発行による同窓会誌的一冊。既に校名に興譲館の名は消えていたが、タイトルからは興譲館の流れをくむ学校としての矜持が感じられる。内容は在校生・卒業生からの寄稿文を中心に、撃剣大会の記録や、当時黎明期にあった野球の試合記録など多岐にわたる。

この第二巻第二号が発行された翌 9 月に関東町に新校舎が完成したため、この号が北堀端の校舎時代最後のものとなった。

（写真）米沢新聞明治 34 年 9 月 19 日付 2 面（当館蔵）

米沢中学校の関東町（現西大通）への移転開校式を伝える記事。元禄 10 年（1697）、上杉綱憲による学問所創設からの歴史を綴る。おどろくことに、米沢新聞ではこの後、9 月 26 日までの 8 日間にわたって、中学校新築に関連する記事を掲載し続けた。県立化や校名変更の際とは比較にならない扱い方からは、当時において校舎の新築移転に大きな関心が寄せられていたことがうかがわれる。

（写真）米沢新聞明治 34 年 9 月 19 日付 3 面（当館蔵）

米沢中学の移転開校式に関する情報を伝える。式場に設置された明治天皇の御真影にかけられる帳（とぼり・ペール）は門東町の西野芳太郎が製作したものであると報じる。前述のとおり西野芳太郎は、藩校興譲館で優秀な成績を納めた西野孝八（佐久）の長男である。

興譲 創立五十年記念号（当館蔵 K051/ヤ）

明治 19 年（1886）9 月 19 日北堀端への新校舎移転を創立記念日として、そこから 50 年にあたる昭和 11 年（1936）に発行された記念号。卒業生らの思い出が寄せられているが、明治 36 年卒業の針重敬喜の文章には、明治 34 年の関東町への校舎移転を契機とし、校風に大きな変化が起こったと綴られている。当時を知る人々にとって、明治 34 年の校舎移転は大きな転機だったことがうかがえる。今年（2026）はそれから 125 年後にあたる。

この文章を寄せた針重敬喜は編集者として活躍し、また自費でテニス雑誌を発行するなど、日本のテニス普及に貢献した人物として知られる。

管窺武鑑（当館蔵興譲館本カ 137）

景勝家臣・夏目定吉の子・定房の著による軍記物。上杉家や定房が仕えた永井家に関する歴史など内容は多岐にわたる。成立は近世前期と考えられる。筆写本が全国に複数件伝来している。

本資料は興譲館本に含まれているが、見返しにある書き込みから、明治 32 年（1899）に酒田の太物商・田中鈔太郎が古道具屋から買い求めたものであることがわかる。また、蔵書印からは田中の手に渡る前には酒田の塾教師・山口五四郎の所有であったことがうか

がえる。複数人の手を経て、近代以降図書館の所蔵となり興譲館本のうちに組み込まれたものと推測される。

甲陽軍鑑（当館蔵興譲館本コ 112）

戦国大名武田氏の兵法を記した軍学書。著者は甲州流軍学の創始者である小幡景憲。近世において広く流布した書籍で、今日における武田信玄像に大きな影響を与えたとされる。

本資料の表紙には「和三十三番」と記されているが、これは前出の「興譲館書目」の記述とも合致しており、藩校興譲館で使用されたものと断定できる。米沢藩の藩校においても武田氏にまつわる書籍が読まれていたことがわかる。

嚶鳴館遺草（当館蔵興譲館本オ 52）

鷹山の師として知られる細井平洲の遺稿集。漢詩文の遺稿集は「嚶鳴館遺稿」と称されたのに対し、和文の遺稿集である本書は遺草と称された。平洲没後 33 年にあたる天保 6 年(1835)刊行。各地に広く伝来している。

前出「興譲館書目」に本書の名は記されてはいるが、本資料が藩校興譲館で使用されたものか否かは確証が得られない。

英音論（当館蔵興譲館本エ 33）

C・H・ダラス著、吉尾和一訳。ダラスは明治 4 年（1871）、興譲館内に設けられた洋学舎の語学教師として米沢に招かれた英国人で、米沢牛を全国に紹介した人としても知られる。

本書はダラスが米沢に在った明治 5 年、英語の発音方法について簡便に解説したものである。

欧西紀行（当館蔵興譲館本オ 77）

慶応 3 年（1867）刊行。著者は高島祐啓。文久元年 12 月（1862）江戸幕府からヨーロッパ諸国へ派遣された使節団に医師として同行した際に見聞した出来事などを記す。

蔵書印などから、本資料は明治期に興譲館で使用されていたものと推測される。

南総里見八犬伝（当館蔵興譲館本サ 39）

滝沢馬琴による長編小説。文化 11 年（1814）から天保 12 年（1841）までに 106 冊が刊行された。

本資料の蔵書印から、もとは大町の商家・大和屋（渡部家）の蔵書であったことがわかる。大正時代に興譲館本に組み込まれたものとされている。

（文責：宮澤崇士）